「良い影響（福音）をもたらす」

～変わらない土台～　　ヘブル書　１３章５節～９節

スペインで父子がけんかをして息子パコが出ていき，生き別れたままになってしまいました。父は年をとり，もう一度息子を話し合いたいと思い，探し回りましたが見つかりません。新聞記事に「バルセロナ広場で待っています。」と載せたところ，800 人のパコが待っていました。スペインの中で父と仲たがいしているパコが 800 人もいたのです。私たちの周りにもこういうことが多々あります。ある一つの出来事やプライドから言ってはいけない言葉を伝えてしまったために関係が壊れてしまうことがあります。人生の中には，たった一つの出来事で価値観さえも変わってしまうような出来事があります。聖書の中にもそんなストーリーが出てきます。

■ 放蕩息子

ある人に二人の息子がいた。弟は父が健在にもかかわらず財産の分け前を請求した。父は悲しみながらも要求通りに与えると，その息子は出ていき，放蕩の限りを尽くして財産を使い果した。その放蕩息子は友達から裏切られ，豚の世話をして使用人として働かなければならなくなった。そこで父の元に帰ろうと決意した。父は毎日丘の上でその息子の帰りを待っていて，彼を見つけると父は彼を抱きしめた。そこで息子は悔い改め，「お父さん，私を使用人として使ってください。」と。父は「あなたは私の息子ではないか。」と言い，帰って宴会を開いた。それを見た兄は父親に「放蕩の限りを尽くした息子になぜこんな宴会を開いてやるのか。私にはヤギさえもくれたことはないのに。」と怒りをぶつけた。
あなたは，この３人のうちのどのタイプの人間になりたいですか。弟は失敗をしたが，正しい生き方を学び，悔い改めるチャンスを得ました。そして赦されることを知りました。聖書には人の生き様が出てきます。ここでは，二人の生き様がでてきます。一人の人はさげずみ，ののしり，かたくなになっていく人。もう一人は自らの道を改め決断し闘ってでも戻ろうとする人。
あなたは山で生きるヤギと人と共に群れで生きる羊，どちらのタイプですか。人間は一人で生きることはできません。人間の性質を学ぶ生き物として，聖書には羊が出てきます。詩編の２３篇の「羊飼いから見る聖書」をぜひ読んでみてください。人間がどのような生き物で，羊飼いが必要ということがよく分かります。ダビデは国家権力から逃げ惑う中で「主は私の羊飼い　私は乏しいことはありません」ということを学びました。このご時世だからこそ，このみ言葉を覚えておきたいです。神様は私たちを杖や鞭で打つわけではありません。羊飼いは羊を愛して，羊が間違ったところに行きそうになった時に戻すために使ったのです。敵がいても問題があっても，私はそこで食事ができると言っています。羊を願いながらもヤギの道を選んではならないのです。羊の群れの中に協調せず自ら間違った行動をとって散らしてしまうヤギのような羊がいます。敵が来ると，それだけが迷い出て食われてしまうのです。自らが造られた存在が何であるかをよく知っておかなければなりません。

■ マルコ４章 24 節～ 34 節（タラントのたとえ）

先週のメッセージで語られたマルコ４章２４節～３４節　(タラントのたとえ) のように，私たちは秤縄ではかってはいけません・教会に集う者は安心ではなく，平安を願い求めたいものです。平安とはいかなる状況にあっても心が落ち着いて状況です。世界中でたくさんの伝染病・災害・天変地異が起こる中，私たちはこれまでと同じだと思ってはいけません。これらのことを通して，安心を求めて慌てふためいて買い漁るのではなく，備えていかなければなりません。平安をもって正しく理解して備えておけばいいのです。タラントのたとえであったように，人を決めつけてはなりません。決めつけると私たちが得ようとしていたものまで失ってしまいます。自分の測りで善悪を判断すると理不尽が起きてしまいます。

■ 良い影響（福音）をもたらす。～変わらない土台

私たちは自分が測ると言っていることとやっていることが変わってしまいます。それが一致するように真剣に闘うのがクリスチャンです。聖書では，人を裁くのではなく，その人がなぜ間違ってしまうのかを分かれと言っています。自分も間違いをしてきたからです。自分が赦されたのならその人が正しい判断ができるように一緒に闘わなければなりません。私たちは，この言葉からよい影響（福音）を与えているのか判断しなければなりません。よい影響とは，一人の人が自らが犯した罪ではないのにその罪を背負って命をかけて生き様を生き抜き，十字架にかかって，自らが犯した罪ではない罪を背負って彼らに命を与えたということです。自分のために死んだ人がいると。イエス様は自分のために死に，自分は正しく生きろと言ってくれた。だから正しく生きようと努力します。これがクリスチャンです。イエス様の歴史が私たちに継承されたからです。歴史を書いている私たちは，彼の歴史に後書きしているのです。彼の歴史を引き継いで自分が今生きている。皆さんは良い知らせを携えて生きていますか。

■ ヘブル書　13 章５節～９節

８節イエス・キリストは昨日も今日も，また永遠に変わることのない方です。これがとても大切なメッセージです。これは変わらない土台だということです。ヘブル人に対してパウロが語ったメッセージです。人もこの世の問題も私たちに影響を与えることはできません。物理的な影響を与えても，心に影響を与えることはないのです。心に影響を受けているなら，土台が揺らいでいるということです。私たちは不安になる必要はありません。イエス様が変わらないのなら，私たちも変えてはいけないところを変えないようにしなければなりません。誰かから影響を受けて怒ってはいけません。だからつまずきます。変わらないことに徹した人がいます。彼は闘いました。辛かったし，苦しかったと思います。しかし彼は変わりませんでした。なぜなら使命に生きたからです。弱さは持っていたけれど闘いました。私たちは負けてしまいます。負けた時に負けたことを認めて戻らなければなりません。そのことを決意して生きるのがクリスチャンです。変わらなかった人から学びましょう。何が違う状況が起きた時違うことを言っていてはいけません。色々な異なった教えに惑わされてはいけません。心に強さを持っていれば勝ち抜いていけるのです。恵みによって心が強められています。だから変わってはいけない道を選んでください。心が弱る瞬間は恵みから目が離れている時です。

■ とげのついた棒をけるのはあなたにとって痛いことだ

パウロは熱心さのあまり，自分がやっていることを何とか守ろうとしました。迫害の根拠は守りでした。これは私たちがよくやってしまうことです。お互いが自分を守りたいために相手にとげのある棒を蹴っているのです。蹴るたびに痛いので傷つけられたと言います。あなたが敵だと思っている人は敵ではありません。決めつけてとげを作ってしまっているのです。味方だと思って接すれば，傷つくことはありません。
パウロを教えた人はすべての人に尊敬されているパリサイ人の律法学者ガマリエルでした。彼は，ユダヤ人が大勢を占める会議の中で，非難することなく正しい言葉で人々を説得して終わらせました。
熱心さは本意ではないことを人にさせてしまうことがあります。間違った行動を起こしそうになった時ガマリエルのようでありたいと思います。本当の教えと今自分がやっていることが一致しているかどうかよく考えたほうがよいでしょう。イエス様から習った私たちが正しいと思って行っていることが正しいとは限りません。そこで直接彼につながらなければなりません。

■ C. S. ルイスと富士子ヘミングウェイ

「ナルニア国物語」を書いたルイスは，「水は欲しがるけど水が出てくる蛇口は要らないと言う人がいます。蛇口は要らないと言っている人は水も要らないと言っているのと同じです。」と言っています。神様の言ったこの部分は要るけれど，それ以外は自分は聞きたくないと言っています。あなたの心がなるように神をつかっているのです。私たちはいつも神の御心がなるようにという者でありたいです。
富士子ヘミングウェイというピアニストは，チャンスが訪れた時に耳が聞こえなくなりますが，「箴言」のみ言葉を大切にどんな時も諦めず自分の苦境を受け入れ正しい決断をして生きていました。彼女は 60 歳を過ぎてから有名になり，評価されました。彼女は神を信じ続け，変わらなかったのです。「私のピアノはこの 60 年間の生き様だ」と彼女は言います。
自分の人生が人に影響を与えるのにはその人の背後にある生き様が影響を与えるのです。私たちは苦難や戦いがある時，負けずに神様と共に乗り越える人になっていきましょう。
イエス様は十字架に向かって行かれました。彼の人生を省みながら考えてみましょう。今自分が生きている道が本当に正しいのか，自分の思いが本当にふさわしいのか，諦めようとしていることはないか，愛する者を敵にしてしまっていないか。とげをもたらせているのは決めつけというあなたのとげかもしれません。

（要約者：浅野恵子）

（２０２０年３月１日）